
潮風の声

れいちえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

潮風の声

【Nコード】

N3753G

【作者名】

れいちえる

【あらすじ】

昔、一人の旅人さんがいました。ある日、とある砂漠の町にやってきた時、一人の女の人に自分も連れて行ってもらえないか、と頼まれました。その町は今とても物騒になっていて、もうここに居たくは無いのだけれど身よりも、出て行くあてもないので困り果てていたとのことでした。旅は道連れ、世は情け。どこかで嘘を付いていると気付いていましたが、旅人さんはその女の人を連れて行くことにしました。

第一話（前書き）

このお話は「砂漠の涙」の続編となります。
ただしお読みになられていなくても大きく支障はございませんので
安心してどうぞ。

第一話

ある日、車に乗った一人の旅人さんがやってきました。

ここはとても広い砂漠で、木はほとんど生えていません。遠くの方にぼつりぼつりと、わずかに地平線を盛り上げている影が見えるのですが、葉をつけているのか、枯れてしまっているのかも遠すぎてわかりません。わずかばかりの草がちらほらとまとまって生えていましたが、照り付ける太陽の日差しが頑張っているその細い葉を焼いてしまいそうでした。

その車の走る道は舗装されていなくて、しかもさらさらとした砂で表面を覆われていましたが、幸い地面は固くてタイヤを取られてしまうことはありませんでした。大きいエンジンの音と排気ガスとともに、その後ろに砂を巻き上げて進んでいきました。

その車の後部座席にはたくさんの旅荷物が乗っていました。幾つもの大きな空き缶も乗っていました。舗装されていない道路なのでよくカタカタと揺れます。その揺れと共にカランカラン、ぽこんぽこんと小気味の良い音を立てました。助手席には何か容器が置かれているだけでした。運転している旅人さんがそれを手に取り、蓋を開け、口をつけました。口をつけた後すぐに容器の蓋を閉め、また助手席におきます。唇がちよつとだけ湿っていました。どうやら水筒のようです。含んだお水を少し口の中で転がした後、喉が動きまします。これだけ乾いた空気の中だと言うのに一口飲んだだけで我慢したところを見ると、持ち合わせているお水もそんなにたくさん残っ

ていなさそうです。

旅人さんは日中ずっと車を走らせました。お日様が地平線の向こうに沈んでしまう少し前から車のヘッドライトをつけて走っていきましたが、お日様が隠れた後は残った光もすぐに消えてしまい本当に真っ暗になりました。

今日はまだ月が出ていませんがヘッドライトは行く先を照らしてくれます。気にせず走ることも出来そうでしたが燃料の残りを気にしないではいけないので、道に迷う可能性や、悪路にはまってしまつて脱出するために無駄にエンジンを回す羽目になることを避けるために今日はここで車を止めて、野営をすることに決めました。

火を焚き、食事を用意します。食事といっても用意されたのは缶詰一個と、瓶詰めが二個、それとクラツカーのようなものだけです。缶詰入りのお肉を火で炙つてほおばります。瓶詰めの中身はというと、一つはジャムで、もう一つはバターでした。クラツカーに乗せて口に運びます。大人が満足できるとは思えないのですが、きつと食料も十分じゃないのでしょうか。わずかばかりのご飯を摂つて、後片付けをしていきました。空いた缶詰の缶は地面に埋めました。瓶の中身はまだまだあります。

空気が乾いて、雲ひとつ無い砂漠の夜はとても冷え込みます。出来れば一晩中火に当たっていたいのですが、用心しなくてはいいけません。こんな生き物のいそうにない砂漠では猛獣に襲われなさそうです。万が一のことがないとも言えませんし、何より怖いのは人でした。焚き火の明かりを頼りに野盗の一団が現れないとも限りません。火を消し、車を少し走らせます。月が出てきたので夜目の利くこの旅人さんはヘッドライトをつけずにゆっくり運転しました。この車はつやのない深い緑色をしていて、よく目を凝らしても夜の

闇の中では目立たなくて、遠くから見たらどこにあるのかよくわかりません。

しばらく走って焚き火をしたところから離れると、また車を止めました。後部座席の荷物の中にまとめてある寝袋を取り出して、座席の背もたれを倒します。ドアを閉めたまま器用に寝袋を広げ、体をその中に入れていきます。すっぱり入りきると程なくして寝息が聞こえてきました。

今日はここまでのようです。

第二話

今日もとても晴れていました。雲ひとつ無く、快晴です。不用意に外に出ようものならかんかん照りのお日様にこんがり焼かれてしまいそうなほどでした。

今日もまた旅人さんは車を走らせていました。窓を少し開けて風を取り込みながら砂煙をあげて西へ西へと向かいます。空気は乾ききっていて、風と一緒に砂も入ってきました。喉も大分渴いていました。ですが旅人さんは我慢しました。持ち合わせのお水も、もう助手席に乗せている水筒の分しかありません。一番近い町まで結構な距離があると聞いていたので、前の町で十分に準備したはずでした。ところが実際のところは教えられていたよりももっと遠かったのです。もう一週間は砂漠の中を走っています。燃料ももう一缶しかありません。

旅人さんは本当に次の町にたどり着くことができるのか少し心配でした。でも慌てるようなことはありません。今一番してはいけないうのが焦ったり怒ったりすることでした。残りわずかなお水と燃料を少しでも節約して、無駄に体力を使ったり汗をかいたりしないように心を落ち着けて少しでも早く次の町を目指します。

お日様が空の一番高いところへ上がって少しした頃でした。遠くにぼんやりと何かが見えました。一面に広がる砂模様とは違った何やら角ばったものが見えてきました。建物でしょうか。ですが塵気楼が見えているのかもしれない。もう少しかもしれないですが、実際はもっと遠いかもしれません。旅人さんは期待しすぎないように、と気を引き締めました。

お日様が傾いて来た頃、とうとう次の町に到着しました。町が近づくにつれて少しずつ道の脇に生える青々とした草が増えていきましたので、この町の周りには十分なお水がありそうです。旅人さんは久しぶりに一息つける、とほっとした顔を見せました。

ここに来るまでに訪れた砂漠のオアシスの町はどこも賑やかでした。ところがこの町はどうも様子が違います。道を行く人も、お店を開けて商売をしている人も、何だかぴりぴりしていました。

旅人さんを嫌っているから、という事ではありません。旅人さんがお水と車の燃料と、しばらく泊まるための宿のことを尋ねるとどの人も快く教えてくれました。ですがだれもが緊張しているようであまり笑顔や笑い声がありません。もうすぐ夕方だからなのかもしれませんが、子供達が遊んでいる姿もほとんど見かけません。気になったのですが、まずは長旅の疲れを癒すために先程教えてもらった宿屋に向かい、休むことにしました。

次の日。お日様が出てきて窓から光が差し込んできたのとはほぼ同時に旅人さんは目を覚ましました。だいたい一週間ぶりに車の中の寝袋ではなく、ベッドで背中と足を十分に伸ばして眠ることが出来て非常に気持ちのいい目覚めでした。軽くストレッチをして体をほぐします。ぽきぽきと背中が鳴りました。肩を回し、膝と肘を伸ばし、長い間車に乗って固まりかけていた筋肉が少しだけですがほぐれていくのを感じました。

久しぶりに鏡を見ました。無精ひげがいっぱいです。持ち物の中のカミソリを取り出して丁寧に剃りました。ちょっとだけ手元が狂って下顎のところに傷がついてしまいましたが、本当にちよっぴりの傷だったので少し血が滲んだだけですぐに止まりました。

朝のご飯は固く焼かれたパンでした。宿で分けてもらったもので

す。この町では家畜も育てているようで、一緒にミルクもいたただきました。久しぶりのミルクです。そのまま食べても大丈夫ですが、固く焼かれたパンも口の中でミルクと一緒に溶けて柔らかくなり、それとともに香ばしさだけでなくパン本来の甘みが広がります。ミルクの柔らかな香りがその甘みを引き立てます。ささやかながらも、久しぶりのごちそうでした。

朝ごはんも済ませ、外に出ます。今日は次の旅支度をするための買い物をすることにしました。最初にお水を買ひ、次に車の燃料を買いました。自分の車に積まれていた大きな空き缶に入れました。燃料の節約のために車はエンジンをかけずに置いたままです。お店で借りた荷車に乗せて運びます。もう少して空っぽのタンクに十分燃料を入れた後、また空になった大きな空き缶を持って行き、またいっぱいになるまで買いました。また荷車に乗せて運びます。車の中がちょっとオイルくさくなりました。

次は食べ物を買うために市場に行きました。保存の利くものを選びます。安くならないんだったら他をあたるか、まとめて買うから安くできないか、と値切ることも忘れません。他の町では珍重されるかもしれないのでこの町の特産品を探したりもしました。

市場なのでそれなりに人もいて、賑わっています。ですがやっぱり昨日感じたように何だか緊張感が漂っていました。しっかり値切って買い物をした後、お店のご主人に何かあったのかと尋ねました。すると旅人さんにあまりこの町に長居しないほうがいい、と言ひ出しました。もつと詳しく聞くと、この一、二ヶ月ほどの間にこの町でいろいろな事故や事件が多発していると教えてくれました。それによってたくさんの方が怪我をし、亡くなっているとのことでした。

旅人さんもその話を聞いてなるべく早めにこの町から出て行こうと決めました。一応旅荷物の準備にもう一日使わなくてはいけないので、何事もなければ二日後に出発という事にしました。

「あの… もし？」

一度宿屋に戻って旅荷物の整理をしようと町中を歩いていた時でした。不意に誰かに呼び止められました。

「旅の方… ですよ？」

振り返るとそこにはひとりの女の人が立っていました。見た目は若く、黒い髪の毛をしたとてもきれいな人でした。白いローブを着ています。胸のところの青いブローチが印象的でした。

その女の人は旅人さんにどこから来たのか、どこへ向かっているのか聞きました。旅人さんは西へ向かっている、とだけ答えました。それを聞いて女の人は少し言葉を切りました。何か考えているようです。

「…女の私がこんなことをお願いしてお困りになるかもしれませんか……」

女の人は続けました。旅人さんも足を止めて聞いています。

「私を連れて行っていただけませんか？」

旅人さんは少し驚きました。こんな若くてきれいな女の人が見ず知らずの自分のような男の旅の連れになりたいと言うのです。よほどの理由がありそうです。すぐには答えられない、とだけ返しました。女の人は話だけでも聞いて欲しいと言い、今夜この町の酒場に来てくれないかと頼みました。それならば、と旅人さんも首を縦に振りました。

その時、少し遠くからでしたが建物を揺らすような大きな音が響きました。旅人さんも身構えます。音のした方では、わーわーと騒ぎが起きていました。しかし女の人は動じる様子がありません。

「え？ ええ、恥ずかしい話ですけども、最近この町ではたびたびあるものですから…。慣れてしまったのかもしれない」

あまり気にも留めていない様子のその女の人と夜に会う約束をして、旅人さんは宿屋に戻っていきました。

第三話

夜になりました。町中は静かなものでした。旅人さんは家々からもれる灯りを頼りに街路を歩きます。宿屋で教えてもらった酒場を探して歩いている途中、壁に焦げたような跡の在る建物をみつけました。昼間あつた大きな音がした方角とは違うので、旅人さんがこの町に着く以前に何かがあつた物だと知れました。今日あつたあの大きな音はおそらく何かが発した音でしょう。こんな物騒な町にはあまり居られないな、と呟きました。折角苦労してやってきたのですが、残念です。

酒場に着きました。お昼に出会った女の人が出来なかつたとしても旅人さんは構いませんでした。旅人さんはお酒に目が無いと言うことではありませんでしたが、そこそこ飲める人でしたのでどの町に行っても大抵酒場に行っていました。おいしいお酒があればそれをいくつか買うこともありました。よその町で高く売れるかもしれない。そう言うこともあつてもともと酒場に行く予定だったので。お店の中はがらんとしていました。それもそのはずです。以前から物騒になつてきているような町で、まさに今日の昼間に大きな事件があつたのなら、そんな夜の夜に外を歩くような人はあまり居ないのが普通です。今晚はお店を閉めてしまつていてもおかしくないでしょう。

お店のテーブルに座つて、お店の人のおすすめのお酒と食べ物を頼みました。お酒は小さなコップに入れられてきました。飲む前に臭いをかぐと、むせ返りそうなほど濃厚なアルコールの香りがしました。それとともにどこか甘く、今までかいたことの無い独特なのに嫌味のない香りが鼻の中に広がります。お酒に弱い人でしたら飲

む前から酔っ払ってしまいそうです。

少しだけ口に含みました。先ほどの香りが一気に体中に広がりま
す。喉を通っただけなのに全身が熱くなるような感じがしました。
とても強いお酒です。ですがただ強いだけでなくその風味は格別で
した。ほんの少しだけだったのに、吸い込む空気までもその余韻を
いつまでも残します。旅人さんはこのお酒を気に入りました。

何からできるお酒かと聞くと、この辺りだけに生える肉厚の葉を
持つ植物から取れるお酒だとのこと。そして飲み方が違つと言
われました。なんでもこの小さなコップに入つた分を一口に飲み下
してしまうのだそうです。お酒に添えられた果物をかじり、口に含
んだその果汁とともにいただくとなおおいしいのだそうです。

折角のよいお酒なのにもつたいたいと思いましたが試しにやって
みました。途端に喉の奥から全身が熱くなり、吐く息も吸う息も先
ほどのたまらない風味に満たされました。まるで自分の体すべてが
お酒になったかのようでした。一緒に口にした果汁の爽やかさが頭
までお酒に溶けてしまいそうな感覚を覚ましてくれて、次を催促す
るかのようでした。旅人さんはこのお酒を本当に気に入りました。

丁度その時お店の扉が開き、白い服の人が入ってきました。旅人
さんはお酒を堪能して、次は一緒に出された料理に手をつけようと
していたところで、誰かが入ってきたことに気付いていませんでし
た。

「どうですか？ そのお酒、父も好きだったんです」

声をかけられた方に顔を向けると、そこにはお昼に出会った女の
人が立っていました。向かいの席を良いか、と聞かれました。お酒
のこともあつて気分の良くなっていた旅人さんは快く、どうぞ、と
招きました。

「その腸詰の焼き物、とてもおいしいんですよ。この町ではあまり

家畜をお肉として使わないので少し貴重な保存食でもあるんです。他にもこのチーズ。ちょっと変わった臭いがすると思いますけど、口溶けが良くって」

この町の育ちなんでしょう。お店の人の代わりに色々教えてくれました。これだけ気立てもよくて器量も良い娘さんだというのに、お店の人はあまりこの女の人の人に関わりあいたくないような感じで、遠くから様子を見ているだけでした。そのことに旅人さんはいち早く気がついていましたが特に聞くことをしませんでした。

この町はどうだったかとか、これまでの旅の疲れは取れたかとか、一通りにこやかに話をしたあとです。女の人の表情が少しかげりましました。

「それから… 昼間のお話しの続きなのですが…」

前の晩に飲んだお酒も一晩良く眠ったことで抜けました。悪酔いの無い本当に良いお酒です。気に入った旅人さんはすっかり何本か分けてもらって、旅荷物の中に入れました。車の整備をして、特に悪い箇所が無いことも確認しました。食料もあります。お水もあります。燃料もたくさん用意しました。

西の方角にある次の町まで二日もあれば行けるとのことでした。用意した燃料もお水も、前の町からここに来るまでに準備した量よりもたくさんあります。一人であれば何かトラブルがあったとしても十分な量です。明日問題なく出発する予定です。余った時間は市場に行ったり、町中を歩いたり、町の人と話をしたりして過ごしました。この日は昨日のような出来事は起こらず、穏やかでした。

出発の日です。旅人さんはその日の朝早くに宿屋を出ました。まだ真つ暗です。宿屋のご主人たちにはその前の夜にあらかじめ断っていましたので、鍵をカウンターにおいて静かに扉を開けて外に出て行きました。お金ももう前の晩に支払いを済ませてしまっています。わずかな荷物を入れた袋を持って、乗ってきた車の方へ向かいます。だんだんとあたりが明るくなってきた頃、町の外れに止めてある車のところに着きました。

「やっぱり、この時間でしたわね」

白いローブを着た女の人が車の傍に立っていました。胸のところの青い宝石のついたブローチが印象的です。明け方は非常に冷え込むため、ローブのフードをすっぽりと被っていました。その奥の黒い髪と、とてもきれいなのにどこか悲しげな顔をしたその人は二日前に出会ったあの女の人でした。

「私があなただったとしても、きっと同じことをしたと思います。ですから、そのようにしてみました」

旅人さんは困ったように頭をかきました。少しずつ少しずつ東の

空が赤くなつていきます。

「約束は守りました。連れて行ってください」

大きいため息について旅人さんは運転席のドアを開けて乗り込みます。女の人は車の外で背筋を伸ばして立ったままです。車に乗り込んだ旅人さんはドアを閉めました。すぐにエンジンをかけませんでした。少し時間が経ちました。

不意に助手席のドアが開きました。丁度お日様が地平線から顔を出しました。遮るものがないので辺りが一気に明るくなりました。車と女の人の影が、これから一緒に行くほうに向けて長く伸びます。女の人はフードを下ろし、無言のまま頭を下げて、車に乗りました。その時見せた彼女の笑顔はお日様の光もあつてか、とても明るく、あたたかくなるような笑顔でした。

第四話

二日経ちました。三日目の朝です。部屋の中に朝日が差し込みます。小さな声がして、ベッドのシートがもそつと動きました。ちよつと間があった後、布擦れの音と共にベッドの主が体を起こしました。ちよつと眠たそうな目をしています。

「おはようございます」

とつくに目を覚ましていて椅子の上に腰掛けていた男の人を見つけると朝の挨拶をしました。目を擦りながらベッドから下りました。黒くてきれいな長い髪は寝ているうちに乱れてしまっていて、特に前髪がぼさぼさとしていました。その様を見て男の人 旅人さんは腰を上げ、鏡台をゆずりました。申し訳なさそうな笑顔を見せて、女の人は鏡の前に座り、くしを使って髪を整えていきました。

「あなたが本当に優しい方で、安心して寝ることができました。無理につれてきてもらった以上、正直、どうされても文句は言うまいと覚悟していたのですけど」

鏡越しに女の人が旅人さんに話しかけます。旅人さんは苦笑しました。

「それとも緊張しているのは私よりもあなたの方？ そんな顔しますよ」

はつきり言つてそのとおりでした。この旅人さんは何年も前からずっと一人で旅をしていて、他人、ましてや女の人と宿を共にしたことはありません。できれば連れて行きたくない。前の町でもそう考えて適当に口約束をしたのですが、この女の人がとても聡明で自分の真意を理解し見抜いていたため仕方なしに同行させることにし

たのです。

自分に不利益になりうることは避けて通る、これは旅人にとって鉄則でした。が、それと同時に自らの立てた誓いに従順であることも旅人としての不文律でした。それができないのならば、一人で世界を旅して回るなど出来ません。

それにしてもこの女の人はとてもきれいな人でした。整った顔立ちに豊かな胸、出会った時は白いローブに隠されていましたが、すらっと長く伸びた手足。貴族や富豪の家系に生まれたわけではないのに身体の芯からにじみ出ている気品。ただ、心からの笑顔を見せたのが、出発の時の一度しかなかったことが気になります。

そうこうしているうちに女の人も髪の手入れを終え、すつぽりと自前の白いローブを羽織りました。旅人さんはとくに身支度が出ています。二人そろって部屋を出て、町へと出て行きました。

この町も砂漠の中のオアシスです。砂漠を歩きかう人々が立ち寄るので他の町と同じようにとても賑わっていました。前の町が例外なのでしょう。この砂漠は本当に大きくて、町の人に話を聞くと次の町も、そしてまた次の町もまだ砂漠の中にあるとのことでした。一行が二名になったのでお水と食べ物を用意を怠ることはできません。宿で聞いた市場に向かいます。

「おう、旦那。それにきれいな奥方さん。どうよ、何か買っていないか？」

旅人さんがふと目をやった商品に気を惹かれてわずかに足を止めたその瞬間に露店の店主が声をかけます。その品物はこの砂漠の中では珍しいものでした。魚の干物です。塩漬けもありました。

「どうだい、珍しいだろ。この辺じゃ採れない、魚ってやつだ。俺も生きたヤツを見たことあねえ。なんでも水があふれかえるようなところじゃなきややっていけないんだとよ。ゼイタクなこと言うじ

「やねえかこんな手足も無いもんがよ！」

確かに珍しい、と旅人さんが答えます。旅人さんにとって魚は大して珍しいものではありませんでしたが、こんなところで目にしたことに驚いたのです。それも一尾や二尾ではありません。種類も数もそこそこありました。

「…？ 奥方さんはめずらしくねえんですかい？ ああ、そうか夫婦で旅をしてるわけか。奥方さんは魚のいるところの生まれかい？」

「え、…いえ、本の挿絵で見たことがあるくらい…ですが」

「へえ、魚の絵がある本…。もしかして結構いいところのお嬢さんかい？ あ、いや詮索しすぎて悪かった。ともかくどうだい、結構旨いって評判だ」

旅人さんはこんなところで魚を見られた記念に、ということでも干物を六尾買って行くことにしました。食べると必要以上に喉が渴きそうなので塩漬けは買いませんでした。ところで魚が商品として並んでいるということは河や海が近づいているのかもしれない。

「海？ 河？ ああ、水が信じられねえほどあるところだな。この魚を売ってくれた行商人は西の方から来てるらしい。そっちに行けばきつと着くと思うぜ？ まあまだしばらく砂の海の中だけだよ。」

「お？ 砂の海？ こりゃ良い言い回しだと思わねえかい、旦那」
上機嫌な店主に代金を支払う際にちらつと女の人の方を見ました。彼女の顔色は少し優れなさそうでした。

その日の買い物も終え、やっぱり旅人さんは酒場に出かけました。女の人は少し気分が優れないと言って宿で待っています。宿の主人に教えてもらった酒場に着くと、中からはとても賑やかな活気に溢れた気配が流れてきます。酒場はやはりこうでなければ、と呟いて中に入っていました。

一人席について一杯始めました。ここのお酒も結構強いものでした。決して悪いお酒ではなかったのですが、前の町で出会ったお酒の印象がとても良かったので、残念ながら次点といった感じです。

お酒を片手に考え事を始めました。五日前、前の町の酒場で彼女と話していたことを思い出していました。

「この町も、とてもいい町だったんです。少なくとも私はそう思っていました。母が亡くなってからも、父と一緒に、決して裕福ではなかったとしても幸せに暮らしてきました。でもその父も今年亡くなりました… 昼間の様な物騒な事も多く…」

女の人の声の調子も悲しそうになっていきます。

「この町は私が生まれ、父と母と一緒に暮らしてきた大好きだった町です。でも、この町にはもう身寄りもありません。…お気づきでしょうか？ 私、町の人から避けられているんです。私から見ればいわれの無い理由なのですが、それも長い年月で凝り固まってしまっただけです」

旅人さんは黙って聴いていました。

「この町が大好きだったんです。だからこそ、今ここに居続けることが苦しい。お願いです。連れて行っていただけませんか？」

この話の全てを鵜呑みにしたわけではありません。ですが少なくとも全てが嘘という事は感じられませんでした。彼女が町の人から避けられているというのは真実だったでしょう。両親を亡くし、決して裕福で無いということも事実だったでしょう。それはもしかしたらかつては優雅な貴族や富豪といった身分だった一家が没落したことが原因で、かつての身分差が町の人々を彼女から遠ざけている

ことになっているのかもしれませんが。彼女自身が持つ気品、身寄りがないと言うのもそう言うことであるとすれば納得がいきます。ですがあの日以来この件に関して彼女が口を閉ざしている以上、確かめる手段はありません。そして今日、旅人さんが彼女に対して決定的に違和感を覚えたことがありました。

それは市場でのこと。本当にこの砂漠出身であるのなら魚を見たことが無いものが大半のはずです。ですが彼女は魚を目にしても驚くこともなく、さも当然かのようにしていました。挿絵で魚の存在を知っていたとしても、あの土地で生まれ育ってきた者が店に並んでいた大きな魚を見たことがあるとは思えません。そう言えば前の町での爆発事故があった時も動じませんでした。

ですが彼女に驚くという感情が無いのかと言えばそうではなく、旅人さんの持つ道具の数々に興味を示したり、初めての野営の時に旅人さんの知恵を聞かされた時に感心したりと、人並みの好奇心も持ち合わせている様子がありました。そう考えると、初めて見た物ではなかった、そう考えるのが自然です。

……

なにやら厄介なことに首を突っ込んだかもしれない、そんな感じのため息をついて旅人さんは片手に持っていたグラスを空にしました。

第五話

出発して次の町への途中です。途方も無い砂漠の道のりを、一体どれだけ来たことでしょう。生き物を嫌っているかのように乾ききって輝くこの地に、ひとつの濃い緑色をした物が砂煙を後ろに残して進んで行きます。向かっているのはお日様が傾いていく方角です。

この砂の海の中では大丈夫でしたが、途中でタイヤがパンクした時も、悪路にはまってなかなか抜け出せなくなつた時も、途中であきらめることなく旅人さんはたつた一人で西へ西へとやってきました。しかし今は違います。ずっと人を乗せていなかったその車の助手席に、白いローブをまとつた女の人が乗っています。彼女の胸には青く輝く大きな宝石のついた白いブローチが付いています。

一人つきりではないのですが、車の中が笑顔で包まれたり、楽しそうな声があふれたりすることはなく、どちらかと言うとあまり今までと変わりが無いような感じでした。そして更に言うなれば、一人旅に慣れきってしまった旅人さんにとっては少し窮屈な雰囲気です。

野営をする時も、用を足す時も、今まで一人で勝手気ままにやれてきたものですが、今では相手のことを気遣って行かなくてはいいけません。お水だって食べ物だって今までの量では足りません。ただでさえ次の町までぎりぎりになることがあつたというのに、これでは心配事が増えただけです。

自分のことは自分ですること。

旅人さんが酒場で女の人と交わした約束です。万が一命に危険があつたとしても旅人さんは責任を持たない。食べ物やお水、他に必要なものがあれば自分が持っているお金や持ち物売って手に入れ

ること。一人旅の旅人さんも大人一人をまかなうほどの余裕を持っていないので、これは絶対条件でした。

出会った町で自分に頼みごとをしてきた時、旅人さんはこの身綺麗にしている女の人のことを世間知らずなお嬢さんと思っていました。ところが話してみると彼女はいろいろな苦勞をしていて、分別のちゃんとした大人の女性です。旅に出ると言う意味がわからないはずがありません。普通に町で暮らしている人にとってすぐに領けない条件を出せば諦めるだろうと思っていました。もちろん連れて行くつもりは無かったのですが、約束した以上仕方ありません。

車の中でもう一度だけ聞きました。

「あの晩お話したとおりです。あの町に居ることが辛い、ただそれだけ。同じことをあなたに聞いても良いですか？」

旅人さんはきつとそう言われるだろうと予想していました。旅人さんに深い理由なんてありません。自分の知らない世界を見て回り、その中で生を終えたい。ただそれだけです。

「……私もそうありたかった」

彼女は窓の外の輝く砂の海を見ながら寂しそうに呟きました。後部座席で空き缶がカランカラン、ぽこんぽこんと小気味の良い音を立てていたので旅人さんには聞こえませんでした。

道中トラブルも何も無く、魚の干物を買った町を出て三日目に次の町に到着しました。大分緑が増えてきて、砂漠の終わりが近づいていることを感じさせます。町の人に尋ねてみると、びっくりすることを言われました。ここは砂漠の入り口の町だそうです。旅人さんはシヨックを隠しきれなかったのですが、東から来たと答えると、それならここが出口だ、と明るく笑って言われました。本当に遠い道のでした。

西にある一番近い町は海沿いであって、三日から四日でいけるそ

うです。車の燃料やそのほかの旅の道具を買い集めます。お水、食べ物も二人分買い込みました。お金は全部旅人さんが出しました。

どのお店に行っても夫婦と間違われました。ずいぶんと豪快な女将さんがいたお店でのことです。

「……？ どうしたの！ アンタがそんな悲しそうな顔をしてたらダシナさんが困っちゃうだろう！ ほら、これもつけといて上げるから笑って笑って！ 女が笑って支えてあげなくちゃダメなんだよ！ 男なんてすぐ折れちゃう弱っちい生き物なんだからさ！」

旅人さんもずっと気になっていました。ですがしつこく問いただすことは旅人さんの性にあいませんでしたし、聞いても同じ答えが返ってきます。本当のことは隠し、そして何か嘘をついている。一時の旅連れに過ぎないのでから、答えられないのならそれでもいい。旅人さんに害がないのなら聞かないでおこうと決めていました。

二晩泊まって、出発です。

旅人さんは出発の前の晩、ふと目を覚ましました。窓を閉めたはずなのに涼しい風が吹き込んできたからです。体を起こすことなく窓の方を見ました。窓辺には椅子に腰掛けて、そよ風に長い黒髪をなびかせているきれいな女の人がいきました。薄手の寝衣ねまきだけで、月夜の町を見えています。立ち上がって少し身を乗り出しました。木で出来た床と窓の縁がほんのちよっぴり軋む音が響きます。やさしい月の光が射して、寝衣に彼女の身体の影が映ります。旅人さんはその景色に心を奪われました。ですがやはり彼女の顔は憂いに陰り、旅人さんは心を痛めていました。

出発して二日目です。完全に砂漠ではなくなり、草木が生い茂る草原になりました。遠くの方に山々が見えます。その山々も、頂こ

そ白くまた岩のような色合いでしたが、ふもとから真ん中あたりは緑に覆われているようでした。

すれ違う馬車や、家畜を連れた人を時々見かけます。町というほどではなくても集落があるのかもしれない。砂漠のように孤独を感じるものが少なくなりました。

その日の夜の事です。

「もう、あそこには戻れないんですね」

女の人が口を開きました。旅に出たことが怖くなったのでしょうか。もしもあの町に帰りたくなつたのだとしたら次の町で下ろすので別の旅人に頼んで戻ればいい、そう言つと首を横に強く振りました。

「…そう言つ意味じゃないんです」

旅人さんは問いませんでした。女の人もうその話はしませんでした。

「でも、このあたりで暮らすつていうのも、穏やかで良いのかもしれないですね。あの土地とは違つた大変さがあるのでしようけれど…もし一緒に、と言つたら…いえ、何でも…」
旅人さんは何も言いませんでした。

「…そうだ。あのお酒、持つてるんでしょう？ あの土地へのさよならの意も込めて、飲ませてもらえませんか？」

旅人さんは何も言わずに立ち上がり、車の中の荷物の中から一瓶出して二人のコップの中に少しづつ注ぎました。手に取つた別々のコップを軽く打ち合わせて、二人同時に口をつけます。あのだまらない、甘くて豊かな香りが体全体に広がります。満足げにほつつといたため息をついた旅人さんは、次の瞬間ぎよつとしました。

女の人が肩を揺らし、うつむいています。

「…もう …… 泣かないつて… …決めたのに……」

彼女の膝元を、大粒の雫が濡らしていきました。

第六話

草っぱら中の小さな道を、一台の車が走っていました。

今日の天気もとても良く、お日様がさんと照らしてとても気持ちのよい日でした。こんな日は草の上にごろんと寝そべって、一日中何もしないで過ごすのが一番に思えてなりません。ですが今日も車は西へ西へと向かいます。

旅人さんは途中で何度か車を止めました。止めるたびに外に出ます。もちろん助手席の女の人も一緒に出るよう誘います。地面は前までのような砂とは違って湿って重く、しっかりと体を支えてくれます。崩れることはありません。女の人はしゃがみ込み、地と草を撫でました。

「……ぜんぜん違う。世界が違う。こんなとこまで」

ぼそつと呟きました。ですが旅人さんはちゃんと聞いていました。女の人の横顔がちよこつと見えました。彼女の顔は静かでしたが、どこことなく怒ったように不満そうだと思いました。その後立ち上がって振り返った女の人の顔からは不機嫌な様子は消えていて、爽やかな風に白い雲が流れる空を見ると、穏やかな微笑を代わりに浮かべていました。

昨日の晩から彼女は口を閉ざしてしまい、朝のあいさつをしたきり旅人さんとはしゃべっていません。別段旅人さんも無理に話をさせようとは思っていませんでしたので、彼女が言うまでそのままにいようと考えていました。特に昨日の晩のこと、今までの彼女からは感じられなかった色々なことを尋ねたいのはやまやまでしたが、

止めておきました。

お日様が一番高いところ上がった頃、また車を止めました。食事を用意して、お湯を沸かし、お茶を注ぎます。軽く火で炙った魚の干物を食べました。あつさりした中にほんのり効いた塩加減が、お肉とは違ったうま味を引き立てています。ですが固く焼いたパンにはいまいち合いません。小骨も多くて少し食べるのに難儀しました。味は悪くないのにどうも惜しい感じが否めません。旅人さんは魚を食べるのが初めてではありませんでしたので、なんとなく予想はしていました。その様子を見ていた女の人がちょこつと笑いました。

「お米だったら良かったですけど。塩漬、油漬でしたらパンでも…… あ、いえ。以前口にしたことがあったものですから、つい」
旅人さんがわずかに怪訝けげんそうな顔をしたことを見逃さず、久しぶりに旅人さんと話をしたというのにまた口をつぐんでしまいました。

お昼ごはんを終えた後、片づけをして出発しました。色々考えた上で、旅人さんは一つの確信を持ちました。隣に座る女の人はずつと砂漠の町に居たわけではない。おそらく海の辺りで暮らしたことがあるはずだ。そしておそらくあの町で自分に会って、偶然海のある方角へ向かっていることを知り、そしてついて行きたいと申し出したのだろう、と。

あくまで想像にすぎないので確かめたいと思うのですが、なかなか聞くことができません。昨晚の彼女の涙が胸をよぎるからです。そうこうしているうちにだんだんお日様が傾いていきます。そして少し開けていた窓から入ってくる空気がわずかですが変わってきたことに気が付きました。

多少の雲はありますが、空は晴れていると言うのに風がだんだん

重くなっていきます。そして今までの草原とは異なり吸う空気が何となく甘く、胸を満たすようでした。旅人さんは以前にも同じような経験をしたことがあります。もうそろそろだな、と隣の女の人にも聞こえるように独り言をいいました。

もうしばらく西に走ると、それまで車が進んでいた道が突然なくなりました。崖です。その下に広がるのは大地ではなく、お日様の光をまばゆく受けた無限に広がる広大な水面みなもでした。

海です。

崖の近くで道は北と南に別れていました。前の町で教えてもらった次の町はここから北に向かったところにあるそうです。海を左手に見ながら車は海岸に沿って走っていきました。

一本道で迷うことなく、順調に次の町に着けそうです。きっと日が暮れる頃には着くでしょう。助手席に座っていた女の人はずっと海を見ていました。運転している旅人さんからは後ろ頭しか見えなかったのですが、彼女はずっと微笑をたたえたまま、満たされたような顔をしていました。

遠くに見える入り江に、海岸の色とは違った白い景色が広がっています。水に浮いたままそこに入りする物もあります。おそらく船でしょう。次の町だと思われました。お日様も大分傾いて、到着する頃には水平線に隠れてしまっそうです。旅人さんは少し急こうとアクセルを踏みました。だんだん白い景色がはつきりしてきました。建物がお日様の光を受けて白く輝いているようです。入り江を作る山肌にも白い建物が立ち並びます。風光明媚な土地のようです。旅人さんも少しわくわくしてきました。

そんな時、隣に座る女の人がありました。

「…止めてください。連れて来てくださって、本当にありがとうございます」

もう間もなくで到着です。だと言つのに車を降りると言って聞きません。仕方なしに車を止めると、落ち着いた様子で降りました。旅人さんも続きます。しばらく町のある入り江を見つめて、そのあと崖から広がる大海原に沈もうとしているお日様と向き合いました。その様子を旅人さんは黙ってずっと見ていました。二人以外に人は無く、まるで一枚の絵のようでした。

とうとう旅人さんは聞きました。どうして嘘をついてまで自分について来たのか、と。

「やっぱりお気づきになってたんですね。…ここまで来て隠すこともありません。私の話をいたしましょう」

声穏やかに、女の方は話し始めました。

あの町に生まれ育ったこと

母が先立ち、父と共に裕福でなかったとしても幸せに暮らしてきたこと

その父が無実の罪で囚われ、ひとりにされたこと

無実の罪だというのに小さな町では爪はじきにされ、支えられることなく生きてきたこと

何とか無罪を証明し、再び幸せな日々を取り戻したこと

しかし最早あの町では暮らしていけなくなっていたこと

無罪を証明するまでの間に彼女の父が重い病に侵されてしまっていたこと

あの町を離れ、この先に見える町で生きていくことにしたこと

移り住んでからそれなりに幸せに生きてきたこと

だけど体を壊した父が今年になって亡くなったこと

幸せだった日々を奪い、父を殺したのはあの町の心ない人々であること

それに仕返しをするためにあの町に戻ったこと

爆弾や火、毒を使って騒ぎを起こし、父を、自分を苦しめた者たちを手にかけたこと

そして旅人さんに出会い、今日ついに復讐の旅を終えることがで

きたこと

長い長いお話でした。お日様は今にも水平線に飲み込まれてしま
いそうです。話が終わって、旅人さんと向き合っていた女の人はま
た海のほうを見ていました。旅人さんはその背中をずっと見ていま
した。遠く下のほうから響く波のさざめきがやけに大きく聞こえま
す。

聞かなければ良かった、話させたことでより苦しめてしまったの
ではないか。そんな思いが旅人さんの顔に浮かんでいます。そんな
彼の思いを他所に彼女はすっきりした、晴れ晴れとした顔をしてい
ました。

旅人さんのほうに振り向いた時、彼女は幸せそうに微笑んでいま
した。

「…手を出してください」

歩み寄った彼女は旅人さんの手に何かを握らせました。彼女の胸の
あたりにつけていた青い宝石のついたブローチです。

「…最初に預けたお金も、全て差し上げます。そして母のブローチ
も… 私にはもう必要ありません。これから大切にしてくれる方に、
これを差し上げます。あなたならきつと…」

再び海のほうに向き直り、崖の方に向かって歩いていきます。お
日様が半分くらい沈んでいて、海を美しい朱に染め上げていました。

まるで体に刻み込むかのようにその夕暮れの傍らに立つ女の人に、
旅人さんは声をかけられずにいました。

「本当に、ありがとうございます」

振り返ったときの彼女の顔は、

本当に幸せに満ちあふれていました。

第七話

…

…

波の音が聞こえてきます。静かに、穏やかに、部屋の中を満たしています。

その部屋の中には明かりが付いていませんでしたが、真つ暗ではありません。この部屋にある窓の外の景色は明るく輝いていました。今日もよい天気のようにです。

波の音に混じって、木で出来た扉をノックする音が響きます。きいっと軽い音を立てて扉が開きました。部屋の中が一層明るくなり、ノックして扉を開けた人は無言のまま入るとそのまま扉を閉めました。薄暗い部屋の中を見渡します。窓とは反対の壁際に置かれたベッドの脇に、いつものように人影がありました。ベッドに上半身を預け床に腰を下ろしていた人は、今入ってきた人のことにも留めず、どこを見るわけでもなくぼんやりと無気力な顔をしていました。

入ってきた人は体つきから見て男の人のようです。やっぱり何も言わないままベッドのところの人影に近づいていきます。窓から入る光がその男の人の顔を照らします。入ってきたのはあの旅人さんでした。片手に何かを持っています。ベッドに身を預ける人の正面まで来るとしゃがみ込み、顔を合わせました。ベッドの人はすぐにふいっと顔を背け、シーツに顔をうずめてしまいました。

白いローブを着ていませんが、あの女の人です。あの時見せた幸せそうな笑顔が嘘だったかのようです。うれしくも、かなしくも、苦しくも、楽しくもなく、何も感じない。言葉もなく、ただ息をし

ているのがわかるだけでした。しばらくそばにいた旅人さんは持ってきた何かをテーブルの上に置きました。同じものがテーブルの上に乗っていて、代わりにそれを持っていきました。無言のまま立ち去ります。扉のところまで来ると一度彼女の方へ向き直りました。暗くてよくわからなかったのですが、旅人さんは戸惑った顔をしていたようでした。

テーブルの上に置かれた物は、お盆でした。お盆の上にはパンと、あたたかそうに湯気を立たせたスープが乗っていました。

三日前のことです。

「！ マルキスさんかい！？ どうしたんだい、一体！」

車の助手席に乗せられた女の人を見て、最初に出会った町の人は大きな声を上げました。意識はあるのですが頬を赤く腫らせ、無気力にくったりとしていた彼女を見れば、顔見知りであれば誰もが同じように驚いたでしょう。旅人さんはマルキスと呼ばれたこの女の人を休ませてやりたいので、彼女が住んでいた家を教えて欲しいといいました。

町の人は最初、この旅人さんが女の人に乱暴をして、こんな風にしてしまったのではないかと疑っていたのですが、よくよくみると彼の方にもいくつも傷があります。顔、両腕には真新しい血の痕が付いていて、よくみると着ていた服は一部切り裂かれています。ます。

案内された彼女が住んでいた家は、何ヶ月も前に引き払われていたため、家財道具は一切残されていませんでした。出会った町の人

は二人ともの手当てをするために近所の人を呼び集めてくれました。ベッドを運び込んでもらい、シーツとマットを用意してその上に女の人を横たえました。疲労しきっていたらしく、彼女はそのまま眠りに落ちました。服を脱がせ、汲んできてもらった真水を浸した布で彼女の顔を拭きます。頬を赤く腫らせてはいましたが、それ以外に怪我をしている様子はありませんでした。

旅人さんは別の部屋で手当てされていました。同じように真水を浸した布で傷口をきれいに拭いていきます。幸いなことに深い傷は無く、じんわりと血がにじんできますがすぐに良くなりそうな感じでした。ただ、箇所が多かったので薬草の汁を塗り、包帯を巻いてもらいました。

何があつたのか、と聞かれたのですが、旅人さんは詳しく話しませんでした。けんかになつた、とだけ言いました。

「離して！ 離してよ！」

崖のそばで、女の人の叫び声がします。朱に染まった空と水面がとてもきれいな景色にはまったく似つかわしくない喧騒です。白いローブを着た女の人が男の人に腕をつかまれ、抱き寄せられています。振りほどこうと必死に抵抗しています。あの旅人さんと女の人です。爪を立てて旅人さんの腕を引っかきました。一寸ひるんだ隙に男の腕から逃れると、息を切らせて崖の方へ走っていきこうとします。旅人さんが駆け出し、再び服をつかみます。強引に引き寄せ、後ろから肩を押さえるように抱きしめました。そしてそのまま、離れたところに止められた車の方へとじりじりと寄っていきます。終始暴れまわる彼女を抑えながらなので、なかなか思うように車まで

たどり着けません。

何だかんだしてるうちにまた女の人が旅人さんの腕から抜け出して、崖の方へ走っていきます。やっぱり追いかけて捕まえます。

「何で！ どうしてなの！ 私がどうなるうと責任持たない、どうでもいいって言ったじゃない！」

捕まえられて引きずられていく途中、女の人が声を荒げて抗議していました。それに対する答えは無く、ただ無言で車の方へと連れて行かれます。怒った女の人は旅人さんの腕に噛み付きました。旅人さんは顔をしかめました。力を緩めません。

「どうして好きにさせてくれないの！ いいじゃない！ 知ったでしょう？ 私はここで終わりにするただけについて来たのよ！ あなたを騙してまで！ 私がそんな人間だってわかったのにどうして！」

噛み付いていた口を離して、まくしたてました。旅人さんはたった一言だけ言いました。

だめだ。

それ以上、答えが来ることはありませんでした。女の人は齒軋ぎしりして、一瞬抵抗を止めました。力を緩めませんでした。旅人さんはわずかに彼女の顔をのぞき込みました。その瞬間、女の人は思いつきり頭をそらせ、頭突きを食らわせました。さすがの旅人さんもその一撃を受けたことで力を緩めてしまい、彼女は旅人さんの腕から逃れることができました。お互い息を切らせて向き合います。

「…いいじゃない。私はもう…ひとりで生きていくことに疲れただけ。大勢殺して、苦しめたことに対する罪に耐えられないんじゃない。そうなって当然じゃない、あんな奴ら。苦しむはずの無かったお父さんは、あいつらに殺されたのよ。」

私たちの幸せはお父さんが捕まえられた時にもう終わってしまっ

た。もうその時から死んでたようなものなのよ！　今ここで、こんなに美しい世界に包まれて終わらせることの何がいけないの？　ねえ旅人さん、あなたも言っていたでしょう？　わかってくれると思っただのに！」

丁度その時お日様が沈みきました。旅人さんが一歩彼女に近づきます。が、踏みとどまりました。どこに隠し持っていたのか、女の人はナイフを手にしています。

「もう…　来ないで下さい。わかりますよね」

じりじりと崖の方へとにじり寄っていきます。

「今度こそ、本当にありがとうございました」

そう言っただけで彼女が海のほうへ振り向いた時、旅人さんは彼女を止めるために走り出しました。振り返った女の人が右手に持ったナイフを左から右へと振り回しました。わずかに身をよじりながら胴を引いてかわします。ナイフは旅人さんの服を切っただけでした。

もう一度刃が来る前に旅人さんは左手で女の人の右手首を押さえます。あ、と思った次の瞬間、旅人さんは右手の甲で彼女を強くはたきました。男の力で強く打たれ、力が抜けてしまった彼女は地面に膝をつきました。抵抗する力も出ません。旅人さんはそのままナイフを取り上げ、何とか彼女を車の中に押し込むとエンジンをかけて、もう少し先に見える入り江の町へと車を走らせたのでした。

第八話

この町に到着してから何日経ったのでしょうか。ノックがあつて扉が開きました。

今日もベッドの上に女の人は座っています。ぼうつと窓の外を眺めていました。入ってきた旅人さんはテーブルの上を見遣ります。最初の四日間は全く手も付けられていなかったお盆に乗せられていた食事は、今日もきれいに無くなっていました。それを見て旅人さんは少し顔を和らげました。

もともともあまり喋らない方の旅人さんは無言のままベッドの方へと近づいていきます。お互いの顔が向き合いそうなところまで来ると、女の人はやっぱり今日もふいつと顔を背けてしまいました。お盆を受け取ることもありません。少しため息をついてテーブルの上のお盆と交換していきました。

彼女の胸元には今、青い宝石の付いたブローチはありません。

一日のうちのほとんどをずっとベッドの上で窓の外を見て過ごす彼女は、ほとんど何も考えていない事が多かったのですが、時々色々なことを思い出して、色々なことを考えました。時間だけはたくさんあります。

思い出されることは、お父さんつつましくも幸せに暮らしてきた、彼女の生きてきた中で一番幸せだった時のことがほとんどでした。ほんの数ヶ月前の憎しみに駆られていた時のことはあまり思い出すことはありませんでした。

彼女はお父さんの顔を思い出すたびに、とても幸せだったこと、そしてとても悲しかったことで胸が一杯になりました。幸せだったあ

の時間を奪い、お父さんの命を縮めたかつて愛したあの町が許せませんでした。自分たちのようにあの町で幸せに暮らしている人たちも多いことを知っています。だからなおのこと許せなかったのです。でもめっちゃくちゃにしたところで彼女のお父さんはもう戻らないなんてことは、頭のいい彼女にとってすぐにわかることでした。それでも彼女の炎は消えることはありませんでした。

たくさんの人を苦しめ、復讐を果たした今の彼女にあったのは、達成感でもむなしさでもなく、ただの失望でした。幸せだったあの頃を思い出しても、もうその時には戻ることはできない。だったらせめて、あの時以上の幸せがないこの世界に別れを告げて、神様のもとへ行ったお父さんのところへ行きたい。それなのに最後の最後で自分の一番の望みが失われ、ただここに居るだけの日々。

命を絶つのなら別にこの部屋の中でもできました。でも、今はどうしてなのかそんなことをすることができません。あの日、あの時、夕焼けの海の傍らでは鴻毛つむぎのようなものと感じていたはずなのに、それを邪魔する人もいないのに、出来ないでいました。

怖いというよりも、この部屋にいと何かがそれをさせないようになっている。そんな感じでした。

お父さんの顔を思い出すたびに、彼女自身が忘れている、何かもつとずつと大切なことがあった、そんな気持ち胸の中にわきました。でもそれが何だったのか、いくら思い出そうとしても霧もやがかかったようで、はつきりとしません。

また何日も経ちました。旅人さんと女の人が出会ってから二カ月くらいは経ったでしょうか。旅人さんはまだこの海辺の町に居ました。この町はとても美しく、めずらしく長居をしていた旅人さんを飽きさせることはありませんでした。

白い石造りの家々が立ち並び、砂漠とは異なる強い日差しとそれをきらきらと反射している水面は、まるでこの広い世界にたくさん
の宝石が散りばめられているかのようです。空に浮かぶ雲々は空の
青さを、そしてこの青空は雲の白さをより一層映えさせていました。
砂浜の方を見ればそこにも空がありました。どこまでも広がるマ
リンブルーの世界と、打ち寄せる白波。そしてそれが奏でる波の音
目を奪われる美しさだけでなく、体も心も癒すかのような穏やかな
響きが染み込んできます。

この町で少し働きながら、毎日女の人のところに通いました。旅
人さんがマルキスさんの一人娘に「ほ」の字になったと町の中で噂
が立ちます。町の人に色々言われても、旅人さんは旅を中断してま
で彼女の世話をする自分の本心がどこにあるのかよくわからなかつ
たのですが、少なくとも生まれ故郷をめたくちやくちやくにした彼女を嫌
っているわけではないということだけはわかっていました。

根無し草の彼にとつて、あの町が彼女の手によってどんなことにな
ったとしても、それはあくまで他人事。そんな感覚もあつたので
すが、彼女が根っこから悪魔のような恐ろしい人間だとはどんなに
考えても信じられないのです。

初めて会った時から感じていた彼女が持つ悲しみ。

緑の根付く大地を撫でた時の彼女が見せた慈しみ。

朱色の世界で必死に訴えた彼女の抱えていた怒り。

いろいろな人を見てきた旅人さんは、彼女がどれほど情愛深くて
すばらしい人なのか、ちゃんと分かっていました。それが大き過ぎ
たがゆえに起こした過ち。沈みゆくお日様を背負った彼女に感じた
哀れみが、旅人さんをこの地に留めていたのでしょうか。

その日も頼まれた仕事を終えて、彼女の家に食事を運んでいきま
した。毎日運ぶ食事は旅人さんが作ったのではなく、ご近所の人

交代で彼女のために作ってくれたものでした。気の良いこの町の人々は旅人さんにもご飯を分けてくれて、旅人さんもとても助かっていました。そのお礼に、この町で働かせてもらっていたのです。

ノックをして入ります。今日もやっぱり女の人は窓の外を見ていました。旅人さんがいつものように近くに歩いていきます。

「…ねえ、旅人さん」

この町に来てから初めて女の人が話しかけてきました。驚いて目を丸くした旅人さんは足を止めていました。

「ねえ、旅人さん、聞きたいことがあるの」

旅人さんは、何だい？ と落ち着いた調子で聞き返しました。彼女の方から尋ねてきたのに、何も言わないまま時間が過ぎていきます。どこから話そうか整理をつけているようでした。

「…私は、どうして死ねないのかしら。もう終わりにしたいって話しましたよね。今までどれだけでも時間があつたのに、それでも私はこうして息をしている。あなたが持つてきてくれる食事も摂っている。…どうして、しないのかしら」

旅人さんは町の人から聞いていました。彼女たち親子が今まで暮らしてきた世界とは全く異なり、彼女たちが見たことのない美しさに溢れているこの町で、彼女が父親と本当に仲むつまじく暮らしていたことを。病ゆえ伏せることが多かった彼女の父と、この家で幸せに暮らしていたことを。

旅人さんは気付きました。テーブルの上に持つてきたお盆を乗せ、常に腰のベルトに着けているポシェットの中を探ります。そして彼女の元に歩み寄りました。彼女の正面まで来ると床に膝をつき、彼

女の手をとりました。

何かを渡されたことに気が付いた女の人は、自分の手のひらに握らされた何かを、手を開いて見ました。

それはあの青い宝石の付いた、母の形見のブローチでした。

夫から妻へ、そして母から娘へと受け継がれた大切な家族の愛のしるし。

失って久しかったそれを目にした彼女は、突然ぼろぼろと大粒の涙をこぼし始めました。再び握りしめて声を押し殺して、泣いていきます。旅人さんは膝をついたまま、ベッドに座っている彼女を見上げて言いました。

それを渡してくれた人のことを忘れてはいけない。たとえどれほど辛かったとしても。

その人が何を望んでくれたのか、忘れてはいけない。

その言葉が、彼女が思い出せないでいたことを、暗い底から引っ張り出してくれました。

父は望みました。娘が幸せに生きることを。

母を亡くし、父を失っても、たとえ今が暗かったとしても。

いつか輝く明日があることを信じて生きてくれることを。

声にならない泣き声が部屋の中いっぱいに広がりました。

彼女は悔やみました。自分が愛していたよりもずっとずっと愛してくれたお父さんの思いを忘れていたことを。

泣き崩れていた彼女を抱きしめ、涙が絶えるまで旅人さんは傍に居てくれました。

それからしばらくして、彼女は部屋の中から外に出るようになり
ました。そこに悲しい顔はもうありません。この町が一層明るくな
ったかのようでした。

「やはり、行かれてしまうのですか？」

深い緑色をした車の後部座席にはたくさんの旅荷物が詰め込まれ
ていました。空っぽだった大きな缶カンの中にはたつぷりと車の燃

料が入っています。

「…あの日、砂の海から柔らかな緑の土に出た日に言ったこと、嘘じゃないんですよ」

少し頬を赤らめて続けます。

「それに今日まで一緒にいてくれたじゃないですか？ 私とでは…
ごめんなさい、最後まで困らせてしまつて。あなたは旅人ですものね」

名残惜しそうにしていますが、最後は諦めたようでした。旅人さんも申し訳無さそうにしています。町の人々も旅人さんがこの町を後にすることを残念に思っていました。

いよいよ出発する時間です。口下手な旅人さんはこの町でお世話になった人々に口下手なりにお礼を言つて、車に乗り込みました。エンジンをかけた時、彼女が車に駆け寄りました。とてもやさしい笑顔で微笑む彼女のために運転席の窓を開けると、彼女はそのまま顔を近づけ、旅人さんに口付けしていききました。それを見てひやかす人もいました。お互い笑顔を見せあうと、お元気で、と言葉を残しました。

排気ガスと大きなエンジン音を残して、車は海辺の町を出て行きました。車が見えなくなるまで見送りました。手を振っている人もいます。

白いローブを羽織つた女の人の胸元にはあの青い宝石のついたブローチはありません。笑顔でしたが、とても寂しそうな顔をしています。車が見えなくなった後、空を仰いで呟きました。

「さようなら、私の生涯で愛した最初で最後の人…」

今日もとても良い天気でした。車は海岸線に沿って北へと向かって進みます。左手に見える大海原は青々として、見つめているとそ

のまま吸い込まれてしまいそうでした。

助手席には小さな木箱が置かれていました。蓋が付いているのですが、今はその蓋は開けられています。その中にはまるで海をその中に収めてしまったかのように青く輝く宝石の付いた白いブローチが入っていました。木箱の中に、宝石と一緒に小さく折られた一枚の紙が入っていました。

その中には丁寧な字で、こう書かれています。

『あなたの旅のご無事と、あなたが旅を終えた日の幸せを祈って』
ラケルⅡティムⅡマルキス

第八話（後書き）

「ご読了ありがとうございます。」

れいちえるのお送りいたしました「童話風味小説」はいかがでしたでしょうか。

のどかで、淡々としていて、ちよっぴり身近でささやかな音が聞こえるような気がして、その奥をのぞけばとてもきれいな世界が広がっていて、そして手を伸ばせばその中に生きる人の思いを抱きしめることができる。

そんな雰囲気を感じていただけたのでしたら幸いです。

それでは皆様、

みなさまのもとに、これからも素晴らしい物語の世界が訪れますように。
れいちえるでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3753g/>

潮風の声

2010年10月11日12時36分発行